

2021年9月

# 東京 2020 オリンピック 報告書

広島県バドミントン協会  
審判委員会事務局 林 哲也

東京 2020 オリンピックにラインジャッジ(線審)として参加しました。



## 大会日程

- 7/22(木) ユニホーム受取り、ブリーフィング(線審会議)
  - 7/23(金) ドレスリハーサル(実際にウェア着用で会場で入退場の練習)
  - 7/24(土) 予選ラウンド開始(会場は3コート)
  - 7/29(木)~8/2(月) 決勝ラウンド(会場は1コート)
- ※終盤は、ホテルに帰るのが12時過ぎることもありました。

## 競技会場について

競技会場は武蔵野の森総合スポーツプラザ(東京都調布市)でホテル(京王プラザホテル)から約30分です。体育館の隣に味の素スタジアムがあり、ラグビー会場でした。体育館内はとても明るく、コンサート会場の様な雰囲気、照明がサイドからコートを照らし、眩しく、線審は帽子(キャップ)を被りました。

## ラインジャッジ(線審)について

ローカルな試合は、主審 1 人、線審 2 人で行い、全国大会の準決勝からは主審 1 人、サービスジャッジ 1 人、線審 4 人となります。オリンピック等の国際大会では主審 1 人、サービスジャッジ 1 人、線審 10 人で行います。

この大会に参加した線審は 85 人(国内 65 人、海外 20 人)で、16 グループを編成し、2 グループが 1 チームとなりシフトを組んで業務を行いました。

## 業務内容

大会期間中 28 試合を担当しました。試合終了後に選手をミックスゾーン(インタビューを受ける場所)への誘導もやりました。

日本人選手(奥原希望、山口茜、フクヒロペア)の試合も担当できました。

最初の頃は、自分の担当ラインにシャトルが飛んでこなければ良いのにと考えていました。

背筋を伸ばして椅子に座り、両手を膝の上に置きます。緊張の連続で、両手に汗をかき、それが長い試合では 80 分を超えていました。

しかし、最後の頃には、シャトルが飛んで来ないかなと思うようになり、アウトやインのゼスチャー、「アウト」と大きな声でコールしたいという気持ちに変わりました。



## 決勝戦

当初決勝ラウンドは選抜された人が行う予定でしたが、幸運なことに男子ダブルス決勝戦を担当することになりました。男子選手のスマッシュの初速は時速400キロを超えます。

その試合で、あと 1 点で金メダルが決まるという場面で、なんと私の担当ラインにシャトルが飛んできました。選手がシャトルを打たずに見送ったのです。

私がインのゼスチャーをしたところ、中国選手がチャレンジ(映像による判定で野球ではリクエスト)を要求してきました。

しばらくして、大型スクリーンに、ラインの上にシャトルが落ちている画像が映し出され、私のジャッジのとおりインとなり、その瞬間、台湾ペアの金メダルが決まったのです。自分のジャッジに自信はあったのですが、結果が出るまでの時間がドキドキでした。

## コロナ感染防止対策について

大会に参加するためにオリンピック組織委員会からコロナワクチンを東京都庁で接種できるとの連絡があり、2回東京へ行きました。

ホテルチェックイン後はホテルと大会会場以外の場所への立ち入りが禁止され、ホテルと会場を専用バスで移動しました。(バブル方式)

毎日 PCR 検査を受け、健康管理アプリで体温を報告しました。

### 終わりに

東京へ行く前から不安だらけでしたが、私のグループ(国際線審2人を含む11人)に国際審判員の河原吉伸さん(元広島市西区在住)がいて、国際線審とのコミュニケーションができない私をサポートしてくれて、線審の姿勢やシグナル、インプレー中の目線、主審とのアイコンタクトの方法などたくさんのアドバイスをもらい、助かりました。

グループはとても雰囲気良く、国際審判員の成島リーダーを中心に情報の共有や、試合終了後すぐに意見交換するなど、充実した楽しい時間を過ごすことができました。

このたびは、世界最高峰の大会に関わる機会を与えていただいた広島県バドミントン協会に深く感謝いたします。また、派遣されるにあたり、三王知治審判委員会委員長をはじめ、たくさんの皆様から激励やアドバイスをいただきありがとうございました。

この貴重な経験を今後の広島県バドミントン協会の活動に活かし、審判員のレベルアップに力を入れたいと考えます。



写真右が河原さん



グループの仲間たち

